ウランガラス製品の時代と呼称

1830年代	1830年代 ボヘミア（現在のチェコ）のガラス工芸家フランツ・リーデル氏が、ガラスにウランを着色剤として使用して**ウランガラスを製造**し、娘の名前を取って、アンナゲルブ（Annagelb:アンナの黄色）、アンナグリュン（Annagru″n:アンナの緑）と名づけた。同じ時期にハラッハ家のボヘミアでのガラス工房でもウランガラス工芸品が製造された。
19世紀前半	**Biedermeier時代。**ビーダーマイヤー（独:Biedermeier）とは、19世紀前半のドイツやオーストリアを中心に、もっと身近で日常的なモノに目を向けようとして生まれた市民文化の形態の総称。 ビーダーマイヤーの時代は、広く取ればウィーン体制（1815年）から1848年革命までの期間となるが、1830年代あたりまでという捉え方もある。この概念がよく使われるのは、文学・家具・服装・絵画などを語る際である。
19世紀末から20世紀初頭	**アール・ヌーヴォー（仏: Art Nouveau）**は、19世紀末から20世紀初頭にかけてヨーロッパを中心に開花した国際的な美術運動。「新しい芸術」を意味する。花や植物などの有機的なモチーフや自由曲線の組み合わせによる従来の様式に囚われない装飾性や、鉄やガラスといった当時の新素材の利用などが特徴。分野としては建築、工芸品、グラフィックデザインなど多岐に亘った。 第一次世界大戦を境に、装飾を否定する低コストなモダンデザインが普及するようになると、アール・デコへの移行が起き、アール・ヌーヴォーは世紀末の退廃的なデザインだとして美術史上もほとんど顧みられなくなった。しかし、1960年代のアメリカ合衆国でアール・ヌーヴォーのリバイバルが起こって以降、その豊かな装飾性、個性的な造形の再評価が進んでおり、新古典主義とモダニズムの架け橋と考えられるようになった。
1910年代半ばから1930年代	**アール・デコ（仏：Art Déco）**とは、一般にアール・ヌーヴォーの時代に続き、ヨーロッパおよびアメリカ合衆国（ニューヨーク）を中心に1910年代半ばから1930年代にかけて流行、発展した装飾の一傾向。原義は装飾美術。 幾何学図形をモチーフにした記号的表現や、原色による対比表現などの特徴を持つが、その装飾の度合いや様式は多様である。
米国：1850～1910年代	**EAPGとは** Early American Pattern Glass の略で、デザインが統一されたプレスガラス製の卓上食器類で、**Victorian 時代（およそ1850-1910年）**に米国で生産されたものとされる。
米国：1930～40年代	**1930年代から40年代**の米国のプレスガラス食器は″**Depression（恐慌）** Era Glass″とされている。
1950年代	ウランガラス製造再開
1960年代	ウランガラスへの劣化ウラン使用緩和

2016.1.24